



## 映画を活用した英語学習

村 尾 敏 彦

本稿は、大谷女子大学のマルチメディア (MM) 教室でコンピューター (CP) を活用して、英語英米文学科の学生を対象に、2001 年度に開講した科目 **Movie English** についての授業報告である。過去と未来にわたる英語教育の問題を鷹の目で眺め渡すのではなく、具体的な現実の凸凹をカタツムリの目で観察することが、本稿の課題となる。

### 科目の設置と目的

1995 年度から実施された新カリキュラムによって、科目 **English in Movies** (3 年次配当) が 1997 年度から開講した。従来の英米文学・英語学中心のカリキュラムに、学生の志向性に適合した新しい科目群を選択科目として組み込もうとした試みのひとつだった。英文学科会議で新設科目の内容について話し合った結果、この科目の目的は、「映画の英語を教材として、さまざまな状況で語られる英語表現を理解すること」とされた。1 年目は、LL 教室で市販のビデオ付の教科書を用いて授業をおこなった。この当時は市販教材の映画はぜひぶん古いものが多かったので、2 年目から、教材の映画は自分で収集するようになった。1998 年度の後期から、MM 教室を使い、CP による授業を始めた。さらに、カリキュラム変更により、1998 年度から科目名が **Movie English** (2 年次配当) となる。4 種類のコースが導入され、この科目はコミュニケーション・コースの選択科目となった。このため、この科目の目的として、「さまざまな状況で語られる英語表現を理解すること」に付け加えて、私は、1998

年度から聴解力の養成をめざすことにした。

LL 教室では VHS を使用していたが、MM 教室では CP に載せるため、映像をデジタル化するだけでなく、そもそも CP 上で学習可能なシステムを開発しなければならなかった。ネットワークを介したデータベース上に、字幕、音声、映像を分離しながら同時制御する仕組みによって、この授業が可能になった。このビデオ・オン・デマンド (VOD) を組み込んだ学習システムは、本学教育福祉学科大倉孝昭教授が開発した。

しかし、MM 教室での授業にはいくつかの課題があった。CP の配置がすべて同一方向で、学生に向かい合うように教員が教室の前部に立つと、学生の視線は各自の CP で遮られる。ホワイトボードが使いにくい。学生・教員みんなが顔を合わせることができない。各自の使う CP 以外に、学生ふたりにひとつ画像があって、これに教員の CP 画像を映すことができるが、教員の説明に必要な事柄をすべて提示することはむづかしい。学生の CP が載っている机には、ノートや辞書を置く空間はない。インターネット上の辞書を使えるようになるまでは、学生たちは、キーボード上に辞書を載せていた。旧来の設備と異なる、CP を活用した授業の方式に、教員も学生もとまどっていたのだ。こうした設備をどう配置し、どこにスペースをつくり、どう活用すべきか、については、これからも検討する必要がある。

この科目の設置自体が、新しい方向性をもった新カリキュラムの一部であった。英文学科が導入した4種類のコースは、英語学・英米文学、翻訳、語学検定、コミュニケーションであった。実用的な英語力、コミュニケーションに役立つ英語力、を養成することをうたっていた。このころ、私自身も、新しい授業をつくりはじめなければならないと感じはじめていた。教員になって5年間、自分自身が学生時代に体験してきた授業の方法を真似て授業をおこなっているうちに、どうもこれではだめらしいと思うようになっていた。だが、どうすればいいのかわからなかった。授業の方法を新しくするためには、時間をかけて準備しなければならない。私自身が、新しい能力を身に付けなければ、斬新な方法は使えないのではあるまいか？そこで、映画という新しい教材、と

りわけ、CP という新しいツールを活用することで、少しでも授業を変えていくきっかけになるのではないかと私は、そんなふうに考えていた。

## 授 業 内 容

教材として活用した映画は、*Free Willy*, *The Bodyguard*, *Indiana Jones and the Last Crusade*, *Working Girl*, *Mission Impossible*, *Young Forever*, *X-the File*, *Die Hard*, *Total Recall*。授業の進行は以下のとおりである。

1. 教材の映画の場面を説明する。1本の映画の中から、1回の授業につき1場面3分程度を抜粋して、3週から4週で別の映画に移る。そのため、教材を見る前に、先週みた場面のあと映画の筋がどのように展開したかを口頭で説明する。筋の流れがまったくわからないと、学生たちは聞き取りが非常に困難になるためである。2001年度は日本語で説明したが、2002年度にはまず英語で、次に日本語で説明した。
2. 学生は、VODによりおのおのがコンピュータの画像に映画の場面を映し出し、ヘッドホンで音声を聞く。30～40分間、空所のあるセリフを画像で見て、空所にはいる英語をキーボードで書き込む。これは、データベースに保存される。セリフは25のブロックにあらかじめ分割されて、学生は文番号にポインターを合わせてマウスをクリックするごとに、何回でもそのセリフを聞くことができる。こうして、映像と音声を連動させて繰り返し返すことができる点で、LL教室の設備に勝る。
3. 教員が設定を変更して、空所のない完全シナリオを提示する。学生は、自分が作成した英語と比較し、自分の聞き誤りをみつけながら、それぞれのCPで映画の音声を聞く。
4. 学生は、ひとつのブースにふたりずつ並んですわっている。そのふたりずつに、セリフを割り当てる。10～20分間、学生たちは、ふたりずつで相談して考え、日本語訳をキーボードで入力する。そのさい、インターネット上の英語辞書を活用する。このとき、教員は教室内を回って学生たち

に助言する。

5. 学生たちが送信したセリフの訳を、学生たちはそれぞれに1~5の点数評価する。5~10分間。
6. 教員が、学生の作成したセリフの訳を評価しつつ、セリフの英語表現を説明する。15分間。
7. 学生がおのおの、もう一度映画を見て、授業は終わる。

## 映画の利点

たとえば、“Come on!”という表現には、いくつもの異なる用法がある。「さあ、いっしょに行こう!」という勧誘、「さあ、かかってこい!」という挑発、「もういいかげんにしてくれ」という嫌悪。この表現を具体的状況のなかで使うとき、それぞれにふさわしい声の調子、身体表情がある。映画では、役者が演技によって「自然な」使い方を見せてくれる。教員は、通常、役者ほどにうまく演技できないし、状況を映画ほどにわかりやすく再現することはできない。役者がカメラに向かってまるで話し相手に向かうように語るとき、観客は“Come on!”という表現を臨場感をもって疑似体験できる。

## 聞き取りの構造

音声言語を聞くときには、聴覚器官が感受して音として聞くだけでなく、言語として受容して意味がわからなければならない。この聞き取り行為は、物音として聞こえる (hearing) だけでなく、言語として聞こえる (listening) だけでもなく、文脈や非言語的要素までも含めて聴解 (auding) しなければならない<sup>(1)</sup>。

聞き取り行為のさい、人間は実に複雑な情報処理を行う。河野守夫によれば、holistic で瞬時の判断で行うゲシュタルト知覚による音声処理と、analytic で time-dependent で one by one で処理される予想—検証作業の、ふたつの

方法が関与している<sup>(2)</sup>。音声を英語として適切な単位に区切って聴覚イメージを形成し、そこから意味をつくりあげるだけでなく、予想した意味から逆にもどって、同音異義の表現のどちらが適切か選択したり、文法上欠落のある部分を補って、聴覚イメージを修正する。聞き取りにおいては、こうした往復運動を、一瞬のうちに行う。

### 聞き誤りとは？

ソシユールは、シニフィアンとシニフィエを、紙の裏と表や、風と波紋にたとえている。紙を表と裏に引きちぎることはできないし、風と水面のでこぼこを切り離すこともできない。つまり、両者は不可分なものである。言語が意味化作用をおこなっているかぎりには、そうなのだが、意味化作用に失敗したときは、どうなるのだろうか？ 始めて聞いた外国語は、にわとりやせみの声、電気掃除機の唸り声、と同様に、意味をもたらさない。その音声は、言語としてでなく、物音として聞こえるだけである。ここでは、意味化作用が破綻しているどころか、シニフィアンとシニフィエという2項が対立する認識論的地平自体が生じない。

しかし、その外国語を学び始めると、事態は変わる。「aimamæn」という音声を、「わたしは、人です。」という意味と結びつけたときから、英語を英語として聞く限り、意味化作用をめざして耳を澄ますようになる。だが、英語学習者は、英語を母語とするひとびとのように円滑に意味化作用を行うことはできない。このとき、不完全な意味化作用が生じる。紙が部分的に表と裏に引きちぎられたり、風と波紋の間に空白ができるのだ。ここには、狂気と暴力がある。この暴力的状況は、英語を母語とする人々であっても、言い間違い、聞き違いや思い違いなどによって出くわす日常である。いわんや、世界中で英語を外国語として学習しつつある人々は、いつもこの暴力の支配下にある。

## 聞き誤りの原因

聞こえてきた音声を、英語の文章へと組み立て直す作業が、円滑に行われな  
いとき、どんなことが起こっているか？

1. 単語や句表現自体をもともと知らないために、物音として聞くだけで、  
言語として受容できない。
2. 音声のスピードに、学習者の情報処理のスピードが追いつけない。
3. 日本語にはない音、あるいは、日本語では区別のない音どうしを、聞き  
誤ることが、おこりやすい。これが起こると、間違っただけの音声情報にもとづ  
いて文章を構築するため、間違っただけの文章が生じる。
4. Be 動詞、人称代名詞、指示代名詞、などが、弱音で発音されていて、音  
自体が小さく聞き取りにくいいため、聞き落とししたり、他の単語と取り違え  
る。
5. これまで音声としての英語を、文字言語に従って単語を単位としてのみ  
理解してきたため、音の連結、同化、脱落といった現象に対応できない  
で、間違っただけの文章を構築する。
6. 話者が、聞き手が補って理解してくれると期待して、表現を省略したの  
に、英語学習者が補うことができなくて、不完全な文章を構築する。ここ  
では、英語の文章の意味理解が、深く関わってくる。
7. 句単位での音のかたまりとして聞こえる英語の音が、単語ごとの音から  
ひどくかけ離れたものに変化しているため、学習者を途惑わせる。このと  
き、音の連結、同化、脱落、表現の省略といった現象が複合的に生じてい  
る。

ディクテーションの結果、ほとんど白紙だったり、まるで英語として意味を  
成さない単語の羅列を書き込んだ場合が、1 や 2 のケースであろう。1 につい  
ては、単語、熟語をはじめとして英語表現を書き込んだ、学習者の頭の中に存  
在する辞書のページ数を増やす努力が必要となるであろう。2 については、速

(40)

いスピードでの英語情報処理を必要とする。松野和彦によれば、たとえばニュースの英語は1分間に160~190語くらいのスピードで語られており、これを聞き取るためには速く英語を読み進む練習も必要である<sup>(3)</sup>。

### 聞き誤りの具体例

3について、具体例を挙げる。

日本語では区別のない音を聞き誤る場合。 [l⇔r]

セリフ“Lake’s a little low.” に対して、“Lake’s ( )” という聞き取りの問題を設定した。解答中に、“low” に対して以下のような誤答がみられた。

low→road, rose

その他の誤答例。

rest→less wrong→long lady→ready light→right

least→reach, rich

日本語にない音 [θ] の場合。 [θ⇔s]

thing→singing thoughts→sort, sons, soul

4について、具体例を挙げる。

“So you are something of a paradox” are→a

“She was married?” was→with

“How are we doing?” we→you

“They worked themselves to death” to→×

“This is no accident” this→it

“What’s the problem?” the→a, ×

“That’s her, isn’t it?” it→he

“You’ll have it” will→×



5 について、具体例を挙げる。

音の連結 (linking) によって、語末の子音と、次の単語の語頭の母音が連結する例。

“Why do you have to spoil a perfectly wonderful morning?” a→×  
 “They all in trouble?” all in→only, always, already  
 “let’s give it a chance, okay?” give it a →give the  
 “you got any question about, uh, any of this?” uh→their, there  
 “All I know is” All I→light, right, always  
 “So, I guess I’m not wearing my tux” I’m→some  
 “How was your ride in?” ride in→writing, driving  
 “jump out of the wedding cake?” jump out→Japan

音の同化 (assimilation) によって、隣接する音が影響を与えて、音が変化する例。

“Frank spent six months up here” up here→appear  
 “You’re alive?” →your life, you alive  
 “was Perry with you on this number?” with you→would you  
 “You have to clean up the mess you made” mess you→mesh  
 “eighty-six is your lucky number” →June

音の脱落 (elision) によって、子音が連続するさいに、そのなかのどれかの子音が消える。“admission” の [d] の音が脱落してこの単語をまったく聞き取れなかったり、[k] の音が脱落した “picture” を “pitch” と誤解する場合があるように、音の脱落は同一の単語内でも生じるが、多くの場合2語にまたがって生じる。

[t] の音が脱落する例。

“Ah, neat car!” neat→new, need  
 “It couldn’t be helped” couldn’t→could

“You sure you don’t want some?”      want→one

6 について、具体例を挙げる。

実際に発声された言葉は “Looking for Melina” であるが、映画では話者も聞き手も “(I’m) looking for Melina” と理解しているようだ。しかし、英語学習者は “Looking for Melina” としてしか理解しない。

“Oh, (it) breaks the heart”

“They (are) trying (to) kill Willy”

“I think I (will) get a drink”

“I’m willing to take (the) chance”

“(She) was married?”

“(I)’m a doctor”

7 について、具体例を挙げる。

“Except that I’m older” においては、複合的な音の変化が生じている。“Except” の [ik] の音が消失して [t] の音が脱落している。さらに “that” の語頭の音が消えて、[t] と [ai] が連結している。そのため、学習者は “set time over” といった誤解をする。

“You’ll mark Golitsyn, hand him off to Hannah”

[d], [h] が脱落し、“hand” の [n] と “him” の [i] が連結し、“him” の [m] が “off” と連結している。

“you thought if you simply showed up, I might give it to you?”

“simply” の [m] が脱落し、“showed up” に連結が生じると、学習者は “set be shut up”、“thought should up” といった誤解をする。

“You’ve never seen me panic”

[n] が脱落して “seen me” がまるで1語のようにつながると、“seem” と誤解する。

## 再び、聞き誤りとは？

おそらくは、上に挙げた誤答例を、たんなる恥ずべき過誤、乗り越えるべき愚劣としか考えないなら、正常とみなされる言語活動の円滑な過程において隠された、言語の奇跡あるいは呪いを見逃すことになるのではあるまいか。英語学習という言語体験を、英語運用力を得るという目的のための手段としてのみ考えることで、それ自体のもつ意味を認識しないことにもなるのではあるまいか。

データベースに残った学生のディクテーションの結果を見ると、たしかに、英単語の無法な連続の暴力性に驚くことがある。だが、不完全に聞き取った音声を、懸命に言語として理解しようとする意志と努力にもっと驚く。さらに驚くのは、間違い方がでたらめでなく、きわめて言語的法則をまっとうしていることだ。学習者は、言語生活を生きている。田村隆一とともに「言葉なんか覚えるんじゃなかった」と呟いてもいいくらいだ。生まれたときには、言葉なんか知らなかったのに、人間はなんと逃れがたく言葉に呪縛されるものか。雲を雲として受け取らずに、ヒツジやいわしや人の顔に見えてしまうように、音を音として受容せず、言語として必死に理解しようとする執拗さに、言語という人間の宿命に、驚かざるをえない。この意志と努力は、母語を聞き取っているときにも働いているのに、いつも隠されている。朝、ひとに会ったとき、「おはようございます」と音節ひとつずつを正確に発音するひとは多くない。「ohaaasu」といった音を聞いて、わたしたちは平然と「おはようございます」と聴解している。“seen me”を“seem”と理解する以上の狂気と暴力が、ここに働いているのではないだろうか。

## 2002年度のアンケート集計結果

2002年度にも、2001年度と同じ教材で授業を行っている。2002年11月1

(44)

日に、履修学生対象にアンケート調査を実施し、28名から回答があった。回答は、選択肢から複数回答してよいとしている。「この授業を受講した理由は何ですか？」に対する集計は以下ようになった。①映画が好きだから(18名) ②聞き取りの練習がしたかったから(16名) ③口語英語の表現を知りたかったから(7名) ④パソコンの操作に興味があるから(7名)

「この授業はあなたの役に立ちましたか？」に対する回答は、以下のとおりである。①授業がスタートしたときよりも、英語の聞き取りが面白くなった(19名) ②授業がスタートしたときよりも、英語の聞き取りが上達した(4名) ③いろいろな映画を見て、満足した(10名) ④いろいろな口語表現がわかった(9名) ⑤パソコンの操作がおもしろかった(4名)

アンケートの結果から考えて、学生の多くが、映画に興味をもっており、英語が聞き取れるようになりたいと思っている。この授業は、学生の興味に適った教材で、2年次の学生が英語学習を楽しむきっかけになれるかもしれない。だが、英語の聞き取りが上達したと考える学生が4名しかいないことは、問題である。1週間に1回の授業では、十分な聞き取りの練習はできないため、聞き取りの自学自習を行うような工夫が必要であろう。

## 新しい授業

「新しい授業」をめざして Movie English をつくってきた。しかし、これは、映画という新しい教材と CP という新しいツールを活用することから生じる新しさにすぎない。いまもうすでに、新しくはない。私もまた学生たちが発する息に、耳を澄まそう。その風は歴史の言葉なのだという意志をもって、聴解への努力を続けよう。英語学習者が映画に耳を澄ますように。そこには、詩を書くことに似て、澄んだ水のような暴力と狂気がある。それは、もっと巨大な暴力と狂気の洪水を生き延びるためらしい。すると、「新しい授業」は、その向こうにある広場のようなものなのか。

注

本稿は、大谷女子大学特別研究費の助成（2000・2001年度）による研究成果である。

- (1) 小池生夫 第8章（小池生夫編）『英語のヒアリングとその指導』（東京：大修館、1993）254-55.
- (2) 河野守夫 第2章（小池生夫編）『英語のヒアリングとその指導』（東京：大修館、1993）38-45.
- (3) 松野和彦「リスニングへの7つのアプローチー聞き取り訓練の定式化の試み」  
（松野和彦・吉島茂編）『外国語教育ー理論から実践までー』（東京：朝日出版、2001）97-99.

